

序論)

私達が今読んでいるイザヤ書は、今日読んだ 39 章の前の部分と 39 章の後の部分で大きく内容が異なっています。39 章の前の部分は主にアッシリアの脅威を前提としながら【主】の預言が語られていました。対してこの 39 章以降の部分は、アッシリアではなくってバビロンの脅威に対する【主】の預言が書かれています。

時間軸としては、今日の箇所はアッシリアの王センナケリブがユダから撤退する前の預言ですが、私たちは既に【主】の守りによってアッシリアはユダを占領することができなかった。ということを知っています。では、あの強大なアッシリア帝国から南ユダ王国を守ってくださった神様が、なぜ後からでてくるバビロンからユダを守ってくださらなかったのでしょうか。

今日の箇所には、ユダがやがてバビロンに負けて、バビロン捕囚につれていかれてしまうきっかけとなった出来事が書かれています。なぜ、南ユダ王国はバビロンに滅ぼされることになってしまったのでしょうか。みことばから教えられていきたいと思います。

★自慢するヒゼキヤ

時は、ヒゼキヤが重い死の病に罹りつつも、【主】の哀れみによって奇跡的に癒やされた後の話です。1 節を読んでみましょう。

**39:1** そのころ、バルアダンの子、バビロンの王メロダク・バルアダンは使者を遣わして、手紙と贈り物をヒゼキヤに届けた。彼は病気だったが元気になった、と聞いたからである。

奇跡的な復活を果たしたヒゼキヤのところに遠くバビロンからメロダク・バルアダン王の使者が手紙と贈り物をもってヒゼキヤのところに来ました。これは一見するとヒゼキヤの回復をお祝いするために使者を送ったように見えますが、ここで見逃してはいけないのが、この使者はお祝いのためのプレゼントだけではなく、バビロン王からのメッセージが書かれた手紙も一緒に持ってきた。ということです。

この時はまだ、アッシリア軍隊が【主】によって打たれる前ですから、アッシリアが世界の敵としてあらゆる国を打ち負かしていた時代です。北イスラエル王国をはじめ、様々な国を占領し、あのエジプトさえ打ち負かしたアッシリア。そんなアッシリアに対して本来ならばまともな抵抗なんてできるはずがない弱小国家南ユダ

王国が、なぜか生きながらえており、さらには死の病にかかっているはずのヒゼキヤ王が奇跡的に回復したのを聞いて、バビロンの王はユダに一目置いたのだと思います。恐らくこの手紙にはヒゼキヤの回復をお祝いすることと共に、同盟を結びたいという旨のメッセージが書かれており、同盟するにあたってユダにはどれぐらいの力があるか見せて教えてほしい。という要望があったのだと思います。その証拠に、ヒゼキヤはバビロンの使者の訪問を喜んだだけでなく、自分の国にあるあらゆるものを使者にみせています。2節

**39:2** ヒゼキヤは彼らを喜び、宝庫、銀、金、香料、高価な油、一切の武器庫、彼の宝物倉にあるすべての物を彼らに見せた。ヒゼキヤがその家の中、および国中で、彼らに見せなかった物は一つもなかった。

後にでてくるイザヤに対するヒゼキヤの回答からもわかることですが、この時、ヒゼキヤは大国バビロンの使者の訪問によって自尊心がくすぐられ、自分たちの力を見せつけてやりたいという思いが湧いてきていたのではないのでしょうか。彼は自分たちがもっている財産から武器にいたるまであらゆるものを使者に見せて自慢したのです。

みなさん、ヒゼキヤがもっていた財産や武器はヒゼキヤの功績によって得ることができたものでしょうか？ いいえ、それらは歴代の王たちが蓄えたものであり、【主】なる神様が彼らに与えた物です。ですから彼は本来、その歴代の王たちの功績とか、【主】を誇るべきなのに、ヒゼキヤは自分の価値を見せつけるかのように、あらゆる所有物を使者に見せたのです。「私達はこれだけのものをもっていますよ。同盟するだけの価値があるでしょ」とアピールしたかったのかもかもしれません。

### ★イザヤの問い

このバビロンの使者の訪問をしたイザヤは、急いでヒゼキヤのところに来て、矢継ぎ早にヒゼキヤに詰問をしています。3節と4節を読みましょう。

**39:3** 預言者イザヤはヒゼキヤ王のところに来て、彼に尋ねた。「あの人たちは何と言いましたか。どこから来たのですか。」ヒゼキヤは「遠い国、バビロンから私のところに来ました」と答えた。

**39:4** イザヤは言った。「彼らはあなたの家で何を見たのですか。」ヒゼキヤは答えた。「私の家の中のすべての物を見ました。私の宝物倉の中で彼らに見せなかった物は一つもありません。」

イザヤはヒゼキヤのところにきた使者がどこから来た人で、何を求めて来たのか。恐らく知っていたのだと思います。それにもかかわらずあえて「あの人たちは何と言いましたか。どこから来たのですか。」と質問しているのは、愚かなことをしたヒゼキヤに危機感を抱かせ、悔い改めに導くためです。

聖書にはバビロンからの手紙の内容は詳しく書かれていませんが、先程いったようにヒゼキヤの回復をお祝いし、齒の浮くような台詞でヒゼキヤを褒めた後、ユダの現状を教えてほしいという事と、軍事同盟をしようという提案がかかれていたのだと思います。これは散々イザヤを通して『【主】のみを信頼し、【主】のみにより頼め』と言われてきたヒゼキヤたちにとって、大変、危険な手紙だったのです。ヒゼキヤはそんなことに気づきもせず、「遠い国、バビロンから私のところに来ました」と自慢げにイザヤに答えています。このことばには「イザヤ先生、あのバビロンが私のために遠くからわざわざ使者をおくってくれたんですよ。すごいでしょ。」と自慢しているヒゼキヤの心境が見て取れます。

そして、続くイザヤの「彼らはあなたの家で何を見たのですか。」という問いに対しても、自信満々に「私の家の中のすべての物を見ました。私の宝物倉の中で彼らに見せなかった物は一つもありません。」といったのだと思います。要は「自分たちの素晴らしさを見せつけてやりましたよ。」ということでしょう。

みなさん、イザヤの「あの人達は・・・どこから来たのか」という問いは、私達にとっても非常に重要な問いなのではないでしょうか。バビロンからの使者がどんなにヒゼキヤを褒め称えたとしても、また、軍事同盟の甘い誘惑を携えてきたとしても、それは人からのことばであって【主】からのことばではありません。

イザヤによって散々、【主】により頼めと言われてきたヒゼキヤは、自分を褒めているのも、甘い言葉を投げかけてくるのも【主】ではなく、人である。ということに気づくべきだったのです。

ましてや、このときヒゼキヤは【主】の哀れみによって命をながらえたばかりです。神様の恵みを体験したばかりの状態です。そうであるのならば、自分たちの財宝や武器を誇るのではなく、【主】を賛美し、【主】からのみことばに耳を傾けるべきだったのだと思います。

少なくともアッシリアから挑発されたときにすぐに【主】に祈ったように、バビロンからの手紙を受け取った後、すぐに【主】に対して私達はもうどうしたらよいでしょうか。とお伺いを立てるべきだったと思います。

私達はどうでしょうか。人から注目されたとき、身分の高い人から一目おかれたとき、有頂天になって自慢したりしていないでしょうか。大切なのは人から来た言葉ではなく、【主】からのことばなのです。

みなさん、人のことばによって何かの選択をしなければいけないとき、まずは【主】からの導きをもとめましょう。それが【主】の民として相応しい振る舞い方なのです。

### ★【主】の応え

ヒゼキヤがバビロンの使者に自分のすべてを見せたということは、彼は【主】ではなくってバビロンにすべてを明け渡したのと同じでした。

だから、5-6節の【主】のことばはこのようになっています。

**39:5** イザヤはヒゼキヤに言った。「万軍の【主】のことばを聞きなさい。

**39:6** 見よ。あなたの家にある物、あなたの父祖たちが今日まで蓄えてきた物がすべて、バビロンへ運び去られる日々が来る。何一つ残されることはない——【主】は言われる——。

【主】はヒゼキヤがバビロンの使者にすべて見せたことによって、彼らがユダの家にあるものを、すべて奪うと告げられています。

これは約100年後に起こるバビロン捕囚のことを指しています。

みなさん、【主】以外のものに自分のすべてをさらけ出すとき、それはその人に自分のすべてをまかせることになるのです。そして、【主】ではなく人にそれをするとき、その人は、自分の助けになるのではなく、自分からすべてを奪うものになってしまうのです。だから、私達が自分のすべてをさらけ出すのは、人ではなく【主】に対してすべきなのです。

ヒゼキヤは自分のちっぽけな虚栄心によってバビロンにすべてをみせ、やがて彼らにすべてを奪われるきっかけを作ってしまった。みなさんは人に自分のいいところを見せてやろうという思いを持っていないでしょうか。そのように自分を誇る思いは、自分を滅ぼすことに繋がっているということをここから教えられるのと思います

そして、ヒゼキヤの高慢は、彼の子孫たちにも影響を与えました。7節

39:7 また、あなたが生む、あなた自身の息子たちの中には、捕らえられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者がいる。」

これがどこで実現しているかという点、ダニエルたちによって実現しています。ダニエル書1章1節、3節、6節7節を読んでみましょう。

1:1 ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカドネツアルがエルサレムに来て、これを包囲した。

1:3 王は宦官の長アシュペナズに命じて、イスラエルの人々の中から、王族や貴族を数人選んで連れて来させた。

1:6 彼らのうちには、ユダ族のダニエル、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤがいた。

1:7 宦官の長は彼らに別の名前をつけた。すなわち、ダニエルにはベルテシャツアル、ハナンヤにはシャデラク、ミシャエルにはメシャク、アザルヤにはアベデ・ネゴと名をつけた。

簡単にいえばバビロンの王ネブカドネツアルがユダを包囲占領したときに、彼の宦官の部下にするためにユダの王族・・・つまりヒゼキヤの子孫からダニエルたちを選び、彼らはバビロンの宦官にされてしまった。ということです。

ヒゼキヤの浅はかな自慢が、彼の子孫にまで影響を与えていることを私達はみまします。だからこそ、私達は、私達の次の世代や私達の子孫のためにも、自分が誰のことばに耳を傾けているのか、何を誇っているのか。に注意しておく必要があるのです。

【主】の恵みによって今の自分があるにもかかわらず、まるで自分の功績のように誇ってはいけません。

### ★ヒゼキヤの応答

最後に、この【主】のことばを受けたヒゼキヤの応答をみておわりたいと思います。

39:8 ヒゼキヤはイザヤに言った。「あなたが告げてくれた【主】のことばはありがたい。」彼は、自分が生きている間は平和と安定があるだろう、と思ったのである。

【主】のさばきのことばを聞きながらも、「自分が生きている間は平和と安定があるだろう」と思って「【主】のことばはありがたい。」といったヒゼキヤは、あまりにも自分勝手に、自分の子孫たちの苦労なんて何も考えていないように思えます。

このヒゼキヤのことばには、恐らくそういった自己中心な思いがあったのは確か

だと思いますが、しかし、それと同時にこの「【主】のことばはありがたい。」ということばの中には、自分が【主】に対して犯した罪はとても大きなものであるにもかかわらず、【主】のさばきがなされるまでには猶予があることを感謝している面もあります。【主】のあわれみに感謝しているということです。

ヒゼキヤは自己中心的ではありましたが、それでも【主】の哀れみに気づく部分もあったのです。だからこそ、彼は【主】のさばきを素直に受け入れたのではないのでしょうか。

私達が高慢になり、【主】の導きから離れようとするとき、【主】は厳しいことをなさいます。しかし、その厳しさの中にも【主】の憐れみがあることを気づいて、【主】の導きに従う者となっていきたいと思います。

## まとめ)

最後にヒゼキヤの人生をまとめます。

ヒゼキヤは悪王アハズの子として生まれましたが、【主】の目に叶うことを行い、偶像礼拝の場所である高き所や、石の柱、アシェラ像などを壊し、徹底的に偶像礼拝を排除しました。

そして、アッシリアに何度も攻められ、その信仰を否定されつつも、【主】により頼むことをやめず、【主】へ祈り続けてきました。

しかし、そんな信仰的なヒゼキヤでしたが、アッシリアに財宝を渡して攻撃をやめるように求めたり、エジプトにより頼もうとしてしまったり、バビロンの誘惑にのろうとしてしまったりした人物でもありました。彼はわかりやすい偶像礼拝は拒絶することができましたが、人のことばには弱い人物だったのです。

私達はどうでしょうか。仏壇を拝んだり、日本のあらゆるところにある仏像とか、神棚とか、そういった偶像を拝んだりしないでしょ。人のことばに流されてしまうということはないでしょうか。

【主】により頼め、【主】に信頼せよと散々いわれながらも、いざという時に人の言葉に惑わされてはいないでしょうか。

また、【主】から与えられた恵みをまるで自分の功績のように誇ることはないでしょうか。

みなさん、この世の富や人のことばに惑わされないようにしましょう。

自分を導こうとするものが、【主】からのものなのか、それとも人からのものなのか。見分け、見分けることができないなら【主】に相談して、【主】と共に歩むもの

となりましょう。

パウロはガラテヤ人への手紙でこのようにいっています。

1:10 今、私は人々に取り入ろうとしているのでしょうか。神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、人々を喜ばせようと努めているのでしょうか。もし今なお人々を喜ばせようとしているのなら、私はキリストのしもべではありません。

人に取り入るのではなく、【主】に喜ばれる歩みをするものとなっていきましょう。

また、ヒゼキヤは小さな虚栄心からバビロンにすべてを明渡し、結果、すべてを奪われる者となってしまいました。

私達がすべてを委ねるべきなのは、【主】だけであることを覚えましょう。

自慢は愛の行為ではありません。いつも【主】の前にへりくだって【主】の恵みを賛美し、【主】にすべてを委ねる者となっていきましょう。